

マーク・トウェインのジャンヌ・ダルク観

朝 日 由紀子

I

マーク・トウェイン文学のなかで特異な位置をしめるのが、*Personal Recollections of Joan of Arc*と題する1896年に出版された作品である。著者は、シュール・ルイ・ド・コントとされ、そのフランス国立公文書館所蔵の未公開原稿を、自由に中世フランス語から現代英語に翻訳したのが、ジャン・フランソワ・アルデンであるという体裁をとっており、マーク・トウェインの名は隠されている。そして、アルデンは、「訳者の序文」に続けて、このジャンヌ・ダルクの伝記が世界の伝記文学のなかでもユニークな点は、ひとりの人間の一生について、「宣誓のもと、われわれに証言台から伝えられる唯一の物語」であると宣言するのである。1431年の「処刑裁判」およびそれから25年後に行われた「復権裁判」のそれぞれの公式記録がフランス国立公文書館に保管され驚くべき事実を提供しているが、コントの「個人的回想」は、その公式記録に忠実であり、その点でかれの信頼性は疑う余地がない、とこの作品の真実性を保証する。

マーク・トウェインの文学ジャンルに、歴史的事実とフィクションを織り交ぜた「歴史小説」があり、本作品以前に、1547年のイギリスを舞台とする、*The Prince and the Pauper* (1881年) や、6世紀のイギリスに時空を超えて移動する19世紀のアメリカ人を主人公とする *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889年) がある。前者では、1547年、すなわちヘンリー8世が崩御し、若き後継者エドワード王子がエドワード6

世として即位するまでの時期を軸に、波乱に富む物語が展開する。チューダー朝の人々、ヘンリー8世はじめエリザベス、ジェーン・グレイ、メアリの3人も実名で登場する。一方、エドワード王子と同じ日にロンドンの極貧街で生を受けたトム・キャンティという乞食を配し、マーク・トウェインは、ウェストミンスター宮殿で二人を出会わせ、王子の発案でそれぞれの服装を交換したことから、王子が乞食に、乞食が王子の生活を余儀なく経験していくことになるという史実とはかけ離れたプロットを企てた。後者の *A Connecticut Yankee* は、その題名の通り、アーサー王と円卓の騎士たちが実名で活躍する。その騎士道文化に対置する人物として、マーク・トウェインは、コネティカット州出身のハートフォードの銃器工場の技師ハンク・モーガンという正真正銘のヤンキーを造形した。

これら歴史小説とは、本作品は、あきらかに相違しているといえよう。たしかに、翻訳者アルデンは、実在の人物ではなく、マーク・トウェインのフィクションであり、ジャンヌの小姓兼秘書とされるルイ・ド・コントは、実在の人物ではあるが、ジャンヌと幼なじみであったと語らせているのは、フィクションである。そして、幼友達のひとりで、戦場ではジャンヌの旗手として活躍し、討ち死で最期を遂げる「パラディン」というあだ名のドンレミの村長の息子エドモン・オーブレは、史実にはない人物である。このような文学的工夫はあるものの、巻頭ページに列挙された11点の文献により検証されたものであると明記され、この作品の歴史的真實性がひととき強調されているといってよい。文献の筆頭には、ジュール・キシュラの『ジャンヌ・ダルクの処刑ならびに復権裁判』という同時代の記録を網羅した史料集（全5巻）が挙げられている。1841年～1849年に初めて公刊されたこの裁判記録によって、伝説のジャンヌではなく、歴史的な存在としてのジャンヌに対する興味が喚起される契機となったのである。コントについては、1910年に書かれたレオン・ドゥニの『ジャンヌ・ダルク 失わ

れた真実』のなかで、ジャンヌの質素な生活に関する「小姓であるレイ・ド・コントの証言」が引用されているが、「復権裁判」において証人にもなったのである。

なにより注目すべきは、マーク・トウェインのジャンヌ・ダルクへの関心の深さである。そのきっかけとなったのは、トウェインがまだハンニバルで印刷工見習いであった少年時代、ある日風に吹かれて飛んできた一枚の紙を拾ったことによる。それは、ジャンヌの生涯を記した古い歴史書の1ページで、それを持って帰り、読んだのである。ルーアン城内の牢獄で、二人の乱暴なイギリス人兵士がジャンヌの服を盗む。その事をとがめると、悪口罵詈を浴び、それに耐える姿に、トウェインは憤激とジャンヌに対する同情心を掻き立てられる。それ以来、トウェインは、ずっと関心を持ち続け、手に入る歴史書はすべて読んだ、と1906年1月みずから語っている。執筆を開始したのは、1892年イタリアのフィレンツェに滞在中であった。そして、その作品が、それまで読者が期待する笑いをよぶ内容ではなく、マーク・トウェインにとって真剣さをこめたものとなることから、匿名にする、と妻オリビアと娘スージーに語っている。このようにして世に送った作品について、73歳の誕生日（1908年11月30日）に、つぎのように記している。

I like *Joan of Arc* best of all my books; and it is the best; I know it perfectly well. And besides, it furnished me seven times the pleasure afforded me by any of the others; twelve years of preparation, and two years of writing. The others needed no preparation, and got none.

MARK TWAIN.¹

1 *The Writings of Mark Twain; Volume 17* 本の友社 1988年 p.xx.

最も愛着をもち、最高の作品であると自己評価を下した *Personal Recollections of Joan of Arc* であるが、後世の研究者の目にはマーク・トウェイン文学の最高峰と映っているとはいえないであろう。やはり、*Adventures of Huckleberry Finn* の方に軍配を上げるのではないかと思われる。だが、マーク・トウェインの心に響く人間性という点で、浮浪児ハックとオルレアンの乙女とは、史実か否かを超えてなんらかの共通点があるのではないかという問いは必至であろう。

II

マーク・トウェインのジャンヌ・ダルク観を見ていく上で、まず、トウェインの人間性の探究の道筋をたどり、なにが重要なキー概念であったかを考察していくことから始めたい。本作品は、マーク・トウェインの最後の小説とされているが、これ以降、もっぱら「人間とは何か」の考究へと関心が向けられていく。のちにやはり匿名で出版した *What Is Man?* の原稿に着手したのが、ウィーンに滞在中の1898年の4月からと考えられる。

Mark Twain Papers & Project (カリフォルニア大学バークレー) で、マーク・トウェインの直筆原稿のファイルを見ると、カバーページに、「良心の本当の性格とは何であるか」というタイトルと、「ウィーンにて1898年4月」と鉛筆で記されている。最初は、「人間とは何か?」ではなかった。1900年アメリカに帰国し、その後引き続き1905年まで原稿が練り続けられた。そして、1906年に入り、“Self”、“unselfish”、“selfish”の語を全面的に削除するなど最終的な修正を行い、出版されたのである。ここで注目したいのが、最初の原稿と最終的なプリンターズ・コピーとを点検すると、いかにそれらの語を徹底的に削除し、別の言葉で表現し直したか、という点である。換言すれば、いかにそれらの言葉を多用していたかを物語っている。マーク・トウェインの人間論のメルクマールを示す言葉ともいえよう。

そこで、そうした具体例を見ながら、言葉の用法を通してマーク・トウェインの抱懐していたキー概念を捉えてみたい。出版された書の構成によれば、第2部と第3部にそれらの言葉をめぐる議論が展開している。この作品は、「青年」と「老人」との対話で議論がダイナミックに進行していく形式をとっており、第1部で、「人間即機械」であるという「老人」の説が主張された後、第2部で「人間の唯一の衝動」について議論され、第3部は、その説の実例が多く引用される箇所である。第2部の原稿では、“unselfish”が6回使用されており、また、“selfish”は17回使用されている。しかし、完成版ではいずれも削除、変更されている。「青年」は発言のなかで、「行動自体が、その背後にあるすばらしい (golden) 衝動をはっきり示している。」というが、最初の“unselfish”が、“golden”に変えられた。そのほかの箇所の“unselfish”は、ほぼ「自己犠牲」を表す言葉に置き換えられている。それに対し、“selfish”は、なによりも「自分自身の心の満足だけを求める」という意味の言葉に変更されているか、さらには“selfish”という1語の代わりに、「人間の内にいる傲慢な絶対君主 (that independent Sovereign, that insolent absolute Monarch inside of a man who is the man's Master)」と同様な語を重ねている。人間の行為がいかにか“selfish”という地上最強の支配権をふるう力によってつき動かされるか、が論点となっていることは明白である。「青年」は、「人間の歴史のどこかに、『純粹に完全に自己犠牲』（“unselfish”の語の代用）の行為が記録されているにちがいないですよ。」と主張する。ここでは引用されていないものの、マーク・トウェインの読者には、「ジャンヌ・ダルク」が想起されるはずである。

続く第3部の直筆原稿では、同様に“unselfish”の使用が3回、“selfish”の使用が5回となっているが、さらに、“Self”も5回使われている。“unselfish”は、ここでも「自己犠牲」という語が同義として用いられ、“selfish”

も「おのれを満足させる欲求」という意味の語に変更されている。「人間の内にいる苛酷な主人」あるいは「人間の内で君臨する君主」という語に、“Self”は、いずれも置換されている。通常の意味を超えて、改変によりそれぞれの語の意味合いが明確にされていることは確かであるが、一方、それらの語の頻出は、マーク・トウェインがいかに「自我」の問題に執着していたかを示す証左である。

III

自我というカルヴァン主義的原罪にもつながる問題に、深く沈潜していったマーク・トウェインであるが、翻ってコントの『ジャンヌ・ダルクの個人的回想』という作品で浮彫りになったジャンヌ像とはどのようなものか、あらためて関心をひくテーマである。まず、マーク・トウェインの代弁者とみなされる訳者アルデンの序文に注意してみよう。「ジャンヌ・ダルクの生きた世紀が、歴史のなかであの暗黒時代以来最も残酷な、最も邪悪な、最も腐敗した時代」であった。そのような土壌から、このような人物が生まれた奇跡に驚嘆するほかはない、とアルデンは時代性について解説した後、“She was perhaps the only entirely unselfish person whose name has a place in profane history. No vestige or suggestion of self-seeking can be found in any word or deed of hers.”²と、ジャンヌの比類なき美質の核心をつく。当然、ここでのキーワードは、“unselfish”であり、“self-seeking”（利己主義、身勝手さ）に全く染まっていないことである。

もちろん、アルデンは、ジャンヌ・ダルクの英仏の百年戦争の流れを変えた「偉業」について触れる。そして、彼女によって戴冠することのできたフランス国王は、歴史上「最も無垢な、最も愛らしい、最も敬慕に値する気高い子」をフランスの司祭たちが生きながら処刑台で火あぶりにした

2 *Ibid.* p.xxii.

とき、無気力、無関心であったと締めくくる。ここには、ジャンヌの“unselfish”とはあまりにも対照的な身勝手さの極印が押された国王への告発が込められているといえよう。

数多くあるジャンヌ・ダルク研究書や伝記と異なり、つねにジャンヌの身近にいたコントという語り手が、1492年の時点から回想する形式をとるこの作品は、まず後代の身内の者たちへのメッセージから始まる。82歳になったコントは、つぎのように述懐する。「ようやくあの方の本質を理解し、悟るようになった。この世に生をうけた人の中で最も気高い人生を送った方であったと。唯一イエス・キリストを除いて。」

作品全体は3部構成である。第1部が「ドンレミの村」、第2部が「宮廷および野営地」、第3部が「裁判と殉教」と、それぞれがジャンヌの生涯を物語る主要な場を形成している。コントは、第1部で、1410年代のフランスの悲惨な状態のなかで、6歳のときドンレミの司祭ギョーム・フロントのもとに送られ、そこで読み書きを習い、また教会の近くに住むジャンヌの家族と親しくなった経緯を語る。そして、当時から、ドンレミの村の子供たちは、イギリスとブルゴーニュ派を憎んでいたことも付け加える。ジャンヌのエピソードがいくつか語られていく。ひとつは、ボロをまとった浮浪者に食べ物を差し出したジャンヌに、父親がその男はごろつきだからと反対したのに対し、飢えているのはおなかであって、そのおなかには罪はないし、悪意もないと父親を説得し、その場にいた村長を感心させたエピソード。また、狂人のブノアが檻から抜け出し、斧を振り上げ子供たちに近づいてきたとき、みんなはいつせいに逃げ出したのに、ジャンヌだけはその恐ろしい男と向き合った。それを見ていたコントは、恐怖で体が震えたが、ジャンヌは、その男と話し始め、そのうち手をつないでふたりが歩いていく姿を見る。斧は、ジャンヌのもう一方の手にあった。コントは、ジャンヌが自分の危険など全く忘れ、他の人達の安全だけを考えてい

たと語る。マーク・トウェインは『自伝』のなかで、弱い者や友達のいない者にとって自分の母がつねに味方であったと語り、ジャンヌと似て、だれからも怖がられ、嫌われる乱暴な男の心に静かに訴えかけ、それからその男と親友になった母を語っており、ここでのジャンヌのエピソードと共通している点が興味をひく。

ジャンヌが14歳半になってからのこと、コントは、ジャンヌが心になにか秘密をもっていることに気づく。コントが、フランスの北半分がイギリス軍の支配下にあり、フランスには希望がないと話した時、意外にも「王さまは王冠を戴きます。」それは2年と経たない間に起こるとジャンヌはいう。そのような不可能なことを、誰がやろうというのだとコントが口にする、それに対し、ジャンヌは、「神さまです。」と自然に答える。そのことがあってから、コントは、「声を聴くジャンヌ」としてつとに知られるようになった出来事が実際に起こった1428年5月15日について、それを目撃した者として語っていく。妖精の現れるブナの木が立っている所でジャンヌを見かけたとき、真っ白な影が彼女に近づくのを見る。はじめコントは夢を見ていると思うが、ジャンヌから、それは大天使ミカエルの影であると説明される。そうした経験は3年前からで、光とともにジャンヌには「声」が聞こえるという。そしてこの日、「声」により、神さまのお力によって、自分が軍隊を指揮してフランスを取り戻し、王冠を王太子の頭に戴かせることになることになると知ったと語る。こうして、「声」に全面的に信頼を寄せているジャンヌをはじめコントは知ったのである。

第2部では、「声」に従って行動をおこすジャンヌが語られていく。国王に対する使命を果たすべく、部隊を率いてシノン城にいる国王のもとに進軍していく17歳のジャンヌを見て、兵隊たちのなかには、魔女かサタンかと疑い、ジャンヌの命を奪おうと計画する者がいた。そうした陰謀の首謀者に向かって、「あなたが他人の死をひそかに企むとは悲しいことです。

自分の死がすぐ目の前に迫っているときに。」とジャンヌが言った通り、その夜、浅瀬を渡っているときその男の馬が何かにつまずいて、彼の上に倒れ、男は溺死したため、それからは、兵隊の中に陰謀を企む者はいなくなった。

ジャンヌは、敵側の前線を越えていかなければならない緊張をはらんだ行軍の先頭にいつも立って指揮をとった。ようやく味方のいる町に入り、国王のいるシアン城に近づいていた。国王に謁見を願う手紙をコントに書かせ、それを騎士が届けに行っている間、部隊は休息をとった。しかし、随分手間取った後、ようやく謁見の機会が訪れる。宮廷に赴いたジャンヌに、罾が仕掛けられていたが、みごとに玉座にいる者が国王ではないと気づき、廷臣たちのなかにいるごく控えめな服装をしている男に目をとめ、それが国王であると見抜いたのである。直ちに「乙女ジャンヌ」と名乗り、陛下はランスで戴冠式をあげ、聖別を受け、正統なフランス国王となることを申し上げるよう、神さまから遣わされてきたと告げる。当惑した国王は、「声」が神からのものであるという証拠をジャンヌに求める。国王が抱いていた心の秘密を言い当てたことで、「声」に信頼を置いた国王は、自分が正当な世継ぎであることを確信する。こうした国王の前で行った数々の奇跡は、すぐに四方八方に伝えられた、とコントは語る。それでも、トレモイユとランスの大司教は、国王に、「あの娘の『声』がサタンの声でないこと、娘がサタンの代弁者ではないと、どうしておわかりですか？」と猜疑の種をまいたのである。国王は司教たちに、ジャンヌの超自然的力が天上から来るものか、あるいは、地獄から来るものかをジャンヌに問いただすことを命じた。だが、ジャンヌには脅しもペテンも通用せず、司教たちは、どちらかわからないという最終報告をして、この問題は、ポアティエ大学の学識ある博士たちにゆだねるべき、と進言した。そのため、軍隊を率いてフランスの敵と戦う特別許可を得るためにきていながら、ジャン

ヌはポアティエでさらに3週間も神学教授たちから質問攻めにされる。コントは、「これら賢人たちの学問を、ジャンヌの崇高な無学でまごつかせた。—この無学こそ強力な砦だったのだ。」と語る。ジャンヌはすべての質問に率直に答え、自分が経験した天使たちから聞いたこともありのままに話したのである。コントは、ここで、「復権裁判」のなかで宣誓証言をした者も同様にジャンヌの話を「気高い威厳と純粋さ」であったと語っていることにも触れている。ポアティエでの裁判官の前でのジャンヌの経験は、第3部で語られる処刑裁判の前哨戦ともいべきものであった。だが、処刑裁判と異なり、このポアティエでの裁判では、「ジャンヌ・ダルクは、よきキリスト教徒であり、よきカトリック信者である。国王は、ジャンヌを通してもたらされた援助を受け入れるべきである。そうでなければ、国王は、神の援助に値しないものとなるからである。」という宣告により、閉廷となったのである。

その後、史実にある通り、ジャンヌは、果敢に軍隊を率いて勝利の戦いを続行していく。だが、プルヴァールでの防塞を攻撃する際には、「声」で知らされていた通り、石弓から発射された鉄の矢がジャンヌの首と肩との間に突き刺さり、鮮血を浴びる経験をする。イギリス軍は、大挙して押し寄せ、両軍の死闘が繰り広げられたが、その傷にもかかわらず、ジャンヌは、再度の突撃を命令し、イギリス軍の最後の要塞に猛攻撃を仕掛けた。そして、その結果、ついにオルレアンの包囲は解かれ、1429年5月8日オルレアンの町は解放されたのである。こうして、コントが、ジャンヌ・ダルクの偉業としてあげる5項目はすべて果たされる。すなわち、1. 包囲の解放、2. パテの会戦での勝利、3. シュリ＝シュール＝ロアールでの和解、4. 7月17日ランス大聖堂での国王の戴冠、5. 無血行進、という軍事的功績である。

1429年9月8日パリのサントレノ門に砲弾を浴びせ始め、最後の突撃の

さなかに腿に矢傷を負いながらも撤退することを拒んだジャンヌは、パリを占領することのできる再度の突撃を試みようとしたが、攻撃中止命令が国王より下る。コントによれば、このときブルゴーニュ公からの大使がやってきて密約を結ぼうとしていたのである。そして、9月21日には国王軍は解散する。そして翌年5月23日ジャンヌは、コンピエーニュがブルゴーニュ公に包囲されていたので、その救援に向かうことを決心する。翌日600名の騎兵隊の先頭に立って出発したが、これがジャンヌの最後の行進となった、とコントは回想する。ブルゴーニュ軍との激戦の末、ジャンヌの二人の兄も傷を負い、最後まであきらめなかった「パラディン」もそこで最期を迎えた。そしてジャンヌは、馬から引きずり落とされ、ブルゴーニュ公の捕虜となったのである。

第3部では、コントの耐えがたい憤りから始まる。ジャンヌは、国王がフランスかのどちらかが身代金を支払うことによって、当然釈放されると、コントは期待していたが、国王は沈黙したままであった。そのうちに、ボーヴェのピエール・コーションが、ルーアンの大司教になりたい野望から、ジャンヌの宗教裁判の裁判長をつとめる権利を要求したのである。コントの耳に、ジャンヌがイギリス側に売られたというニュースが入ってくる。

コントは、まもなく始まるジャンヌ・ダルクの「処刑裁判」で主任記録係になるマンションという司祭のところで、記録係の書記という仕事を得る。コーションは、ジャンヌの有利になる証拠が手に入り次第握りつぶしており、裁判長コーションがあつめた裁判官は、学識ある聖職者50人で、みな策略・詭弁に長けた人物たちから構成されていた。最初の裁判で、コーションは数人の書記を窓の下に潜ませ、ジャンヌの答えをゆがめ、捻じ曲げた特別な報告書を書かせていたことを、コントは、マンションから知らされる。そのつぎの日、裁判官の数は62名に増え、その一人、神学博士のボーパールが、ジャンヌに「声」に関して質問をしかけてきた。それは、

だれにとっても好奇心をかき立てる問題であった。ポーペールの狙いは、その「声」がサタンから来たものとなれば、直ちにジャンヌを火刑台に送るところにあった。そのため質問は、微に入り細を穿つもので、ジャンヌのどんな失言でも見逃さない構えであった。しかし、ジャンヌはその罠にかからずに済む。それを目撃したコントは、パリ大学からやってきた学識経験と鋭利な知性の持ち主62人に対し、羊の群れと牛小屋からやってきたジャンヌはたったひとり、という事実を思い、ジャンヌの偉大さに感動する。

そして、3回目の法廷も、同様にポーペールが罠を仕掛けるチャンスをねらっていた。「あなたは、いま神の御恵みをうけているか？」これに、「はい」と答えても、「いいえ」と答えても、結果は同じことで、聖書では人はそのことを知るができないと教えている。ジャンヌの答えは、「もしわたしが神様の御恵みをうけていないならば、神様にお授けくださるようお祈りします。もし受けているのなら、神様にいつまでもそうしてくださるよう、お祈りします。」という人々を驚嘆させるほど見事な返答であった。このような奸計にみちた法廷が、ジャンヌを火刑に処するという目的を果たすまで執拗に開かれていく。公開裁判は、非公開とされ、いっそう裁判のやり方の卑劣さが増していった。

このような苛酷な状況のなかで、ジャンヌは、「忠実」のまさに化身であり、人間の姿をした「不動の意志」であったため、どこまでも「声」に従うことに徹していた、とコントはいう。コントは、ジャンヌの偉大さを回想し、いうまでもなく戦闘において偉大であったが、何よりも一番ジャンヌが偉大であったのは、ルーアンの裁判においてであったと力をこめて語る。

ついに、パリ大学は、ジャンヌのすべての訴因について有罪という裁定をおこなう。罪状は、異端、魔法のほかいくつもの犯罪行為であった。火刑台にむかうジャンヌの最期を回想するなかで、コントは、ジャンヌが教

会から破門されると宣告されたとき、跪いて祈り始めたその姿に触れ、だれのための祈りだったかと問う。じつにジャンヌ自身のためではなく、「すべての人の心に深くしみとおった」その祈りは、フランス国王のためであったことを感動的に回顧する。自分への国王の裏切りや恩知らずに対する怨みの感情は、まったくジャンヌの心になかったのである。それから、ジャンヌは十字架を願い求め、イギリス人兵士が小枝を二つに折り十字の形に結び合わせたものを渡すと、それを胸に収める。その後、修道士のイザンバールが近くの教会からもってきた聖別された十字架を、ジャンヌは、口に押し当てたまま、殉教の階段をのぼっていき、火刑柱の正面に立った。かたわらにイザンバールがおり、ジャンヌは薪の山の頂にあげられ、火刑柱を背にした。ジャンヌは、自分の足元で炎のたてる激しい音を聞きすぐに、危険に身をさらしている修道士のことを心配した。自分の十字架を彼に手渡し、その十字架を自分の顔に向けて高く上げ、神の平和の内に招き入れられるまでそうしてほしいと懇願した。それは、ジャンヌがどうしても炎の危険からかれを遠ざけようとした心の表れ、とコントは理解したのである。

コントは、ジャンヌ・ダルクの示した「自分本位、利己主義、身勝手な野心など、どのような混合物とも全く無縁な純粋な精神」を、なによりも貴重な人類に与えられた珠玉として受け入れるべきという深い感慨に達して、ジャンヌ・ダルクの思い出を結ぶ。

IV

中里は、「ジャンヌ・ダルク処刑裁判と文学作品 少女の『裏切られた遺言』」の論考において、「19世紀半ば以降の文学作品において、『声』を一貫して聞き続けるジャンヌは物語の主人公たりえない。ジャンヌが『声』を疑い、人としての弱さに陥ることこそが、近現代における文学の成立要

件なのではないだろうか。』³、と興味深い問いを提示している。具体的には、ショー、アヌイ、プレヒトの戯曲を例として、「裁判記録には見いだすことのできない、『声の聞こえないジャンヌ』による束の間の悔悛が物語のクライマックスを形成する。裁判記録から浮かび上がる、『声』に従順であり続けるジャンヌを裏切ることによって文学作品が成立するのである。』⁴と結論づける。ここには、歴史上実在した稀有な人物ジャンヌ・ダルクを、文学的に処理する現代的な方法が示されているといえよう。マーク・トウェインと同時代の文芸批評家で、コロンビア大学教授の肩書をもつブランダー・マシューズは、19世紀末には、歴史小説は、古臭いアナクロニズムであるとして、歴史小説家としてのマーク・トウェインを相対的に評価しなかった。歴史と小説とは、まったく相容れないものか、あらためて考察してみなければならない。

興味深いことに、「ジャンヌ・ダルクと文学作品」というテーマを扱った研究書に共通して言及されるのは、18世紀ではヴォルテールの作品『オルレアンの乙女』であり、それに対抗する作品として、19世紀に入って、シラーの『オルレアンの乙女』である。さらに、ジョルジュ・サンドの『ジャンヌ』もドストエフスキーが絶賛したことで知られる。20世紀ではアナトール・フランスの『ジャンヌ・ダルクの生涯』、バーナード・ショーの『聖女ジャンヌ』など、有名作家が描くジャンヌ・ダルク像という関心のためか、解説の対象となっている。だが、ペルヌーのように、「19世紀末には、アメリカのユーモア作家マーク・トウェインによる『ジャンヌ・ダルク』も書かれている。』⁵と、マーク・トウェインに言及している例は珍しい。だが、なんらの説明もほどこされていないため、ユーモア作家が書いた作

3 中里 81頁。

4 同上。

5 ペルヌー [2002年] 131頁。

品として目を引いたのか不明である。

すでに述べたように、マーク・トウェインのジャンヌ・ダルクに対する情熱は、並々ならぬものであったが、それは、パリに滞在中の1895年、H. H. ロジャースに宛てた手紙に如実に読み取れる。「昨晚の7時6分、ジャンヌ・ダルクは火刑に処せられました。・・・わたしは、これまでこの作品ほど、思考と熟考と評価と計画と詰め込み勉強に多大な労力をかけ、また、時間をかけて慎重に丹精をこめて制作したものはありません。というのは、ルーアン裁判の『すべて』を取り入れたかったからです。・・・たぶんその本は、売れないかもしれませんが、そのようなことは、どうでもいい事です — それは、愛のために書かれたのです。」⁶

啓蒙主義、ロマン主義、ヒューマニズムなどさまざまな思想的アプローチから解釈するジャンヌ・ダルク像があっていい一方、その崇高な人間性そのものに惹きつけられて、その思いを結晶化する素朴な道を通る文学作品として、マーク・トウェインの『ジャンヌ・ダルク』がもっと評価されてもいいと思う。

[引用文献]

- 高山一彦 『ジャンヌ・ダルク — 歴史を生き続ける「聖女」-』岩波新書 2005年。
竹下節子 『ジャンヌ・ダルク 超異端の聖女』講談社現代新書 1997年。
中里まき子 「ジャンヌ・ダルク処刑裁判と文学作品 少女の『裏切られた遺言』」『岩手大学人文社会科学部紀要』第85号 2009年12月。
レオン・ドゥニ 浅岡夢二訳 『ジャンヌ・ダルク 失われた真実 一天使の声に導かれた少女』ハート出版 2003年。
レジーヌ・ベルヌー／マリ＝ヴェロニック・克蘭 福本直之訳 『ジャンヌ・ダルク』東京書籍 1992年。
レジーヌ・ベルヌー 遠藤ゆかり訳 『奇跡の少女ジャンヌ・ダルク』創元社 2002年。

6 Paine p. 624.

Paine, Albert Bigelow. *Mark Twain's Letters. Vol. II.* New York: Harper & Brothers Publishers, 1917.

Twain, Mark. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court.* New York: W. W. Norton & Company, 1982.

———. *The Prince and the Pauper.* Berkeley: U of California P, 1979.

———. *What Is Man? And Other Philosophical Writings.* Berkeley: U of California P, 1973.

———. *The Writings of Mark Twain; Volumes 17 & 18.* 本の友社 1988年.